

第二期 第四十七号 (三版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2020. 06. 20 定有堂書店 発行

書けなかった話

奈良 敏行

続・独り遊びの愉しみ「薪ストーブ編」萩原 俊郎

コロナ禍とカイツブリ

吉田 海将

自肅に反する

ワクサカソウヘイ

まだ こどもと歩く日記

鳥居 貴彦

八代日記 (三)

齊藤 仁昭

いのちの波くドキュメンタリーに学ぶ①芝野 浩貴

消えゆくお店 続

ムラカミヒロミ

「鳥の劇場」からのライブ配信

山本千津子

鳥取あれこれ その四十六

内田 克彦

ひそやかな 続々③

秦阜 梅林

コロナの時代の愛 (下)

古賀 啓三

アーリオ・オーリオ

あきの素生

駅前通りの憂鬱

ドラメリア

…… 編集後記



## 書けなかった話

奈良 敏行

(定有堂 店主)

高齢者の読書について書いてみませんか？という趣旨のお誘いがあった。認知症支援を中心とした団体の、サイトマガジンへの寄稿だった。

基本は「年を重ねたからこそ読みたい本」で、高齢者がどう本とポジティブに向き合えるかというテーマでもあった。大事なテーマなので、いい機会だから勉強してみたと思った。学ぶのだから資料を幅広く集め、土台から考えてみようと思った。認知症と本というテーマで鳥取県立図書館の情報相談担当の方に指導を仰いだ。

書籍八冊、図書館での取り組みパンフレットや、記事コピーなど二十点ほどを用意してくださった。最近課題を狭い店内だけでなく、もう少し広い公共圏で考えてみたいと試みている。自分を変える機会を求めつづけている。

でも書けなかった。書くのをストップしたというのが正しいかもしれない。「本」と認知症(高齢者)という現象を天秤にかけると、とてもものに重さが違う。私の

手に負えない。「本」の手にも、容易に負えない。「本プラス行動」でなければ、とても釣り合うものではなかった。

与えられたたぐさんの資料を目にしての考えは、過去は失われていても「未来」は失われていない、失ってはいけないという結論だった。本はいくつになっても、いままでとは違った形であっても、未来へ向かっての希望の光源だ。関わり方も、選書して終わりではなく、本を携えて寄り添う必要がある。「回想法」という着火法も有効だが、やはり共に味わい喜ぶ人が側にいた方がいい。わたしは本屋なので、どうしても「本」頼みのところが強い。「本」本位制で「行い」に乏しい。口先だけの本屋トークで終始するのが日常だ。

前に「たとえば高齢のおばあちゃんにすすめる本は？」と聞かれ「問題は本の内容でなく活字の大きさではないでしょうか」と答えた。以前岩波書店の読者は七十、八十代と聞いたことがある。「世界」の定期購読者は定有堂でも多いが確かにそうだ。それでも、文庫より単行本と注文されることは多い。本屋に来る人たちは、読書の動機付けを外部から与えられなくても自分で十分持っている。でも、ある日ふと姿を見なくなることが悲しい。

依頼された課題の中には、年をとると若い時の本を読

み返して、何か新しい発見があったりするのではないか、年を重ねからこそ何度でも読み返したくなる本というものもあるのではないか、という読書の成熟についてもあつた。

おもしろい角度だが、本屋の店頭では時代が加速度的に過ぎていく。わたし個人には「読書の成熟」はない。ひとつは蔵書を読み返すという習慣がない。古色蒼然、どんどん始末しておきたい。ふたつめは古いものはやはり古い。原典（古典）中心の読書でなく、いつも足下を考える本を読んできたせいかもしれない。たぶんそれが本屋的人間なのだと思う。本を読むより本を売る。売文家という言葉があるが、売本家という言葉はないのだろうか。路上で路上を考える、それが本屋的人間だと思つ。そこではいつも「未来」を語る本を待っている。

店頭（路上）では読者の時間感覚と空間感覚があり、その圏域をはずれたものはアクチュアリティを持ちえない。昨日までの本から、ふっと人々の関心が消える瞬間もある。わたしは店頭の本にそれほど目を通さない。お客さんに内容を教わることの方が多い。でも売れると思つて仕入れた本が、期限を迎え返品せざるを得ないとき、興味深く目を通すことがよくある。なるほどと思うときもあるし、本の置き場所が悪かったと反省することもあ

## 続・独り遊びの愉しみ 「薪ストーブ編」

萩原 俊郎 (倉吉市在住者)

新型コロナで不要の外出をひかえる年配の読者は、読書は欠かせないので注文を計画的にして日常を過ごすようになった。先日も一分くらいで清算し、次の注文メモを置いて立ち去る人がいた。プレヴォー『マノン・レスコー』光文社古典新訳文庫、栗原康『村に火をつけ、白痴になれ』、青木省三『ぼくらの中の「トラウマ」』ちくまブリマー新書などだ。年配者だけど目が丈夫なんだ。きつとゆっくり読むのだろうと想像した。足下を照らす未来読書だと思っ。

コロナの直前、長い時間滞在してダンボールに積み重ねて本を買い続ける青年がいた。大学生が読むような本だったので、高校図書館の買い付けかなと見ていたら、じつは高校生だった。大学が決まったので、これからゆっくり読む本を買うように、親が十万円くれた、とのことだった。「未来」を準備できるこの高校生に畏敬の念を抱いた。この青年の未来読書と先ほどの年配者の未来読書は同質のものだと感じた。

いろんな読書があるけれど、街の本屋では「未来」と「本」が、天秤上で均衡をとりあっているようにいつも見える。

2020.05.24

今回は、季節外れの「薪ストーブ」の話。前回に続き「おうちで何をして楽しむか」あれこれ考えているうちに、引き寄せられてしまった。手間と費用のかかる「遊び」だから、暑いうちから考えておきたい、冬の愉しみ。

少し前から世間でブームと聞いてはいたが、私の周り（主に熟年男たちだが）薪ストーブ人気はすごいことになっていた。

以前、知り合いの窯元を訪ねたら、工房の中で薪ストーブの炎が揺らめいていた。「ハワイからの並行輸入でついに手に入れました。男のロマンですよ」。同年配の窯元は子供のように顔をほころばせた。高い買い物なので奥さんの抵抗にあったが、最後は「ここから出る灰で、釉薬をつくる」と説き伏せたらしい。

陶芸家の夫にそう言われたら、奥さんも二の句が継げない。男のロマンとはいえ、すごい理屈を考えついたものである。伝統の民藝デザインを守り続けるこの器に、薪ストーブ導入後、釉薬の影響をうかがわせる変化は、まだ感じられない(笑)。

地方テレビ局の元専務のHさん。「昔は山陰の冬が嫌いだね。好きなゴルフもできないし。ところが薪ストーブを入れてから、冬が来るのが楽しくて。薪はうちの山からナンボでも採れる」

私の町内に実家がある元ブルガリア大使のFさんは、毎月はるばる東京から実家の裏山の手入れに帰って来る。

「先祖の里山は守らんとなあ」と言うのだが、最近では三朝の山奥まで「間伐ボランティア」として足を延ばすのは、そこで入手した薪を実家の暖炉にくべるのが目的ではないか、とにらんでいる。

リタイヤし始めた新聞社の先輩たちも次々薪ストーブのとりこになっていった。驚いたのは、先輩たちとFさんは家も遠く離れ、なんの接点もなかったのに、「薪が欲しい」一点でいつの間にか、三朝に出かけて一緒に間伐に汗を流す仲間になったことだ。

薪ストーブに「はまった」熟年男たちに共通すること

が三つ。

①「人生観が変わる」「炎の向こうに真実が見える」。ややオーバーな表現で魅力を語り、誰彼となく導入を勧める。②「まずは一度わが家に来い。あの暖かさは体感しないと分かん」と、やたら自宅に誘う。③リタイヤしても生活に余裕がある。

どうしてこうも熟年男たちは薪ストーブにのめり込むのか。一説には、炎を見ていると人間は洞窟でたき火をしていた時代のDNAがよみがえり、世間のしがらみやカミシモを捨て、原始時代のハダカの心に戻るのだという。そして「ボクらの青春はバリケードの中にあつた」だの「男と女はしよせん、ノーサイドのないゲームなのさ」だの、クサイせりふを語り始めることが多い。

最近では「お前も薪ストーブ仲間にならんか、ならぬと後悔するぞ」と団塊世代の先輩たちから70年代のセクトのオルグのような(といっても若い人は分からないか)お誘いがかかる。が、「ええ、まあそのうち」とモゴモゴちゃんと答えないでいる。というのも、薪ストーブにはいろいろ難点があるからだ。

まず①初期投資が高い。ストーブ本体(20〜50万円)はともかく、煙突やレンガ・石による炉壁・炉床の施工費、薪割りの道具など、最低100万円は覚悟。②

ランニングコストも高い。薪は前述のような間伐ボランテアで得る手もあるが、買えばひと冬で12〜15万円。屋根に上がる危険を避け、業者に年一回の煙突掃除を頼んだら軽く3万円前後。メンテナンス費用はバカにならない。

それに③火を着けても、薪ストーブはすぐには暖かくならない。ずっと家にいる人向きなのである。そんな難点の数々も、熟年男たちによれば次の一言で吹き飛ばす。「男のロマンだから」。

要は「男たちの火遊び」なのである。しかし団塊世代はわれわれより裕福なので、つられて本気でお金をかけてはいけない。「安く、いつでも楽しめる」そんなムシのいい薪ストーブ：探すとありましたよ、「なんちゃって薪ストーブ」が。

薪ストーブ先進地のイギリスやアイルランドは排煙規制がけっこう厳しい。そこで開発されたのが「電気暖炉」だ。ゆらめく水蒸気ミストで本物そっくりの炎の作る「ディンプレックス社」製が有名で、安いもので1万円台、高くて10万円台。施工費はタダ、メンテナンスはいらない。安い中古も出回っている。

本物の薪ストーブはコストのほか、近所への煙の心配、家の中が乾燥でパリパリ、ノドがやられるなど、団塊世

代が熱く語る「男のロマン」の裏には、どうやら多くの「男のガマン」が隠されているようなのだ。

「フェイクの炎で、男のロマンが語れるか」という方、ご安心あれ。最近のキャンプ・ブームで、冬のキャンプ用に煙突の穴のあいたテントが人気。またキャンプに使う小さな薪ストーブは1万円台からとリーズナブル。家の中では「フェイクの炎」が美しい電気暖炉、「本物の炎」が見たければベランダにテントを立て、その中で心ゆくまで楽しめばいい。

よし、この冬は（外出自粛が続いているかどうかは分からないが）これで行こう。

# コロナ禍とカイツブリ

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

コロナ禍で動けず、近くの井の頭公園(武蔵野市)周辺をひたすら散歩している。通勤電車の混雑を避けるために始業が1時間遅くなり、水鳥のカイツブリの観察を、出勤途中に毎日するようになった。池の橋の2ほど脇、アシの林に囲まれたパンケーキのような巣に気づいたのは1ヶ月ほど前。思わず身を乗り出すと、カイツブリのお母さんはあわてて巣から逃げ出し、卵1つが転がった。しばらくして、巣近くの橋の一部がコーンと柵で囲われ、管理事務所が用意したポスターも登場。卵を温めているカイツブリを、人間が双眼鏡で遠くから見守る挿絵付きで「離れて! ディスタンス」と世相を反映したできばえだ。「親鳥を警戒させると巣から離れてしまい、卵が冷えたり捕食者に襲われたりします」とらしい。

この都会の公園でも「捕食者」がいるのは私でも知っている。アオダイショウが、10メートルほど離れた岸辺の枝に巻き付いて昼寝をしているのを見たことがあるし、サギやカラスは毎日のように周囲を飛び交っている。きょうも巣は大丈夫だろうか、と毎日チェックするようになった。

巣に気づいて柵の外側に立ち止まるマスク姿のファンとの会話がはずむ。「何匹生まれるんですかね?」「お父さんはどこ?」と家族連れや、カップルに特に人気だ。カイツブリには迷惑かもしれないが、人間が注目していると「捕食者」が近づきにくいのではないかと都合の良い解釈をしてしまう。そういうえば今年の今ごろ、ヒナを狙っていたサギを、おばさん(人間)が手をたたくて追い払っていたのを思い出した。巣には関心を抱かず、全く観察しなかったが。

かつて巣から逃げ出したお母さんが、次第に「動かざること山のごとし」になった。背筋ならぬ首筋がピンとはり、威圧感のオーラは半端ない。お父さんは巣の周りをパトロールし、せつせと巣にエサを運んでいる。

今月中旬、お母さんが一回り大きく、まん丸になったような気がした。パンケーキの上に乗ったドーナツのようだ。よく見ると、羽の間で小さな黄色いくちばしが動いている。何匹生まれたかわからないが、生まれたヒナ

は、お母さんの羽の下に身を隠しているらしい。お父さんがとつてきたエサを食べるときに、顔だけをひよっこり出す。ヒナが動くたびに、お母さんの羽が上下し、よしよし、しているようにも見える。

26日朝、いつものように橋を渡ろうとすると、巢があるアシのかなり手前で、誠実なカイツブリ夫婦と4羽のヒナたちが一緒に泳いでいた。「4匹も！お疲れ様でした」と、通り過ぎようとすると、コーンや柵の多くが倒れ、一部は池の中にあるのに気づいた。もう必要なくなつたんだ、と思いつきに居た事務所のおじさんに聞くと「夜間に酔っ払いが池の中に投げ込んだらう」と嘆いていた。

翌日から、運も味方につけた家族は、再び巢を拠点に暮らしだし、胸をなでおろした。お父さんは水中を飛ぶように泳ぎ、ヒナからは「ペンギンよりすごい」と歓声が上がると。お母さんは、うとうとするヒナたちに、竹内まりやの「いのちの歌」を口ずさみ聞かせていた、と思う。

生まれてきたこと 育ててもらえたこと

出会ったこと笑ったこと そのすべてにありがとう

この命にありがとう

#### (二部抜粋)

カイツブリを守るには細く、頼りなく感じたアシの葉が、いつのまにか長く、太く、色濃くなっているの気づいた。緊急事態宣言が解除され、ベンチでいちやつくマスク着用のカップルも増えてきたが、私たちの「巢ごもり」はいつ終わるのだろうか。

## 自肅に反する

### ワクサカソウヘイ

(文筆業)

たとえば、「映画鑑賞」。この二か月で判明してしまったのだが、どうやら自分は、映画に対してそんなに強い欲求を持っていないようなのである。アマゾンプライムビデオを利用したのも、この二か月で一度きり。ZOOMの打ち合わせで会った編集氏は「いやー、映画館に行けないのが、いま本当に辛いっすねー」とこぼしていたが、自分はいまのところ映画館に行けてなくても全然平気である。あくまでも個人の嗜好性の話ですからね。

「自肅」。

それは、「自らを慎む」という意味合いを持つ言葉であるらしい。

この二か月、ずっと家の中にいた。いや、家の中にいることが「できて」しまった。通勤を必要としない私の稼業は、自宅にこもりっぱなしでもなんとか成り立ってしまっているのである。

そんな話をすると、けっこうたくさんの人に「え、そんなに家の中にいたの？」と驚かれる。「自肅、がんばったね」なんて声をかけられることもある。いや、べつに自発的に行動を慎んでいたわけではなく、流れに身を任せていたらこうなった、っていうだけの話なのだ。引きこもりを体験した日々の中で、明るみになったのは「要／不要」だ。

逆に、いま行きたくてしょうがないのは、「磯」である。私は夏ごとにシュノーケリングを楽しんでいる人間で、移動に圧がかかっているいまだって、とにかく磯遊びをしたくて仕方がない。イソギンチャクやタコの姿を頭に思い描いては、ため息を吐いている毎日だ。

そんな磯への想いを持って余した挙句に、先日、『磯ZINE』なる冊子を自作してしまった。

書き手たちから原稿をもらって、編集してまとめて、印刷機で刷り、一冊一冊、ホッチキスで止めていく。ネットショップを開設し、手紙を付けて購入者に郵送する。ちまちまとした作業は、日々を過ごす中での、大切な句読点となった。

なんだか、改めて思い知った。自分は、こうやって何



かの世界を一冊にまとめる作業が、大好きなのだ。だから自然と、出版業に身を置くようになったのだ。そうか、自分は「本を作ることの楽しさ」によって、ずっと生かされていたのだ。そんなことを、家の中で小さなZINEを製本しながら、しみじみと実感してしまった。これからも書き続けたいな、なんて意欲が新たに湧いたりもした。

自粛をしているのに、「自」は慎まれるどころか、爆ぜていく。自分という個が、なにを求め、なにを自然の状態としているのかが、クリアになっていく。

そう考えると、「自粛期間」よりも以前の日々、つまり、どこにでも足を気軽に運べ、たくさん情報や場面に触れることができた過去のほうが、よっぽど自分のことを慎んでいたのではないか、という気がしてくる。その日に咲いた花を摘むわけでもなく、自分の好きなこと、嫌いなことに立ち止まるわけでもなく、社会に個を溶けさせまくっていたあの頃のほうが、「自己」の有様は不透明であったように思えてしまう。

緊急事態宣言が明けて、また街は賑わいを見せ始めている。それは一瞬、かつての日常が元の通りに戻ったかのような景色として目に映る。しかし、そこに溢れてい

るのはすべて、長い「自粛期間」を経た人たちなのである。自己の嗜好性をクリアにし、意欲のベクトルを研いだ人たちなのである。個を個として取り戻した群衆が、これからプレイを始めるのである。

さて、ここからみんなはどのように動くのか。新しい日常は、すでに始まっている。高みの見物をするのではなく、自分もその蠢きの中で、その日の花をしっかりと摘んでいきたいな、と思っている。

「自粛」とは、つまり自粛に反する行為であったということを知った、春の終わりであった。

お知らせ

『磯ZINE』販売中です。買ったほうがいい。

<https://isozine.base.shop/>

# まだ「」どもと歩く日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

かじさんから電話がかかってくる。ふにやっとした声。「あのメールのやつなー」って今メールきたみたいに言うけど僕が送ったのは三日前だ。一万八千円払う、と言っているのに一万五千円しか受け取らないという。なんだそれは。しかたないのでその三千円でうちにあるレコードを買ってもらうことにした。ホコリかぶってるし誰なのかもよくわからない。唯一わかる一枚にはにこにこぶんのイラストがたのしげに描いてある。どう考えても三千円はもらいすぎな気がする。絶対にもらいすぎだ。電話を切ってからそんなことを考えていたら二日後、「最近電話で話した時に、結局どうするってことになったっけ？」とメールが来る。あー、その感じめっちゃわかるわー。

近くの喫茶店に配達に行く。自転車をこぎ出したとこ

ろでマスクをしていないことに気づいた。そのままいかしばらく迷う。電柱二本分くらいすすんでからやっぱりとりに帰ることにした。店に入った瞬間、クッキーの缶めがけて走り出す二歳児。やめとけー、とかいうてる間にもう四枚目を食べている。オレだけ時間が止まってたんか。

一乗寺で出店。リハビリ。朝、叡山電車の線路沿いを自転車で走ると子どもが荷台で「カンカンカンカン」とさわぎだした。電車が次々くる。よかつたねえ。恵文社につくとゆのうえさんが庭に水をじゃあじゃあまいていた。どこからか黄色いボールをみつけてくる。不安そうにしてた顔がちよつとゆるんだ。荷物をおろし箱を並べていく。絵本を読めとせがむ子。ちよつといまは無理やわー。思えばこの時点で黄色信号だった。表でシャッターを開ける音。ガラガラガラーぎゃー！泣き出してしまった。手を止めるしかない。ごめんちよつと余裕なかつたな。そこ座ってクッキー食べよか。一枚ちよつた。空が青い。

朝ちゃんと遊ぶとちゃんと昼寝する。昼寝しているスキに通販の梱包を進める。四時までにやらなあかんねん。ヤマトの人が来るからね。熊本、北海道、松江。日本広

いなあ。この封筒が明日にはそれぞれの家のポストに入っているらしい。日本狭いなあ。メールやら電話でやりとりはしているからどんな人か想像はできる。でも顔は分からない。通販のお客さんはどんなにがんばっても通販のお客さんやなあと思う。店のように、本買いに来たはずが家の窓を直してもらうことになってたり、近所のおばあちゃんが世間話のついでに本を注文したり、本を買いに来たはずがお菓子だけ買って帰ったり、子どもの面倒見てくれたりということはずまない。通販のお客さんはみんな、なにか目的があつて来てくれている。もちろんなんも買わずに見てるだけの人もいるだろう。いやほとんどの人はそうか。その人たちはこちらからは全く見えない。店では、なにも買わない人もお客さんだ。なぜ買わなかったのか、もしわかったら仕入れはとも楽になる。ほとんどの場合わかんけど。ごちやごちや考えながらうつむいてせつせと封筒にガムテープを貼ったりするのはとてもたのしい。昼寝から覚めた子どもが走ってくる。起きてすぐ走れるんは何才までなんだろう。

店に置いてある手指の消毒液を「しゅっしゅ」と呼ぶようになった。たまに自分の指に吹き掛けようとすると二歳児の手のひらには多すぎる量の消毒液。びちよびちよやんか。ボトルには小さな紙きれが貼つてある。四月の

頭に「ご自由にどうぞ」だった張り紙は五月の連休明けには「ご協力ください」になっていた。そのくらい意識の変化。それ以上のことを言おうとは思わない。なにをどう言ったらいいのかわからない。

夕方は近所の子に遊んでもらうのが日課になった。外にいろんんな人に声をかけられる。向かいのおばあちゃんちの裏庭には亀がいるらしい。「見にくる？」と言われてーと庭に入っていく。はやい。数分後、おじいちゃんの悲鳴のような声が聞こえてきた。抱っこしてもらってにこにことうれしそう。「池のきんぎよに石を投げてねえ」と話すおじいちゃんの眉が下がっている。悪いやつやなーコイツ。

# 八代日記

(三)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

五月某日

スピード感ってなんなんだ。大事なのは「感」じゃなくて「スピード」じゃないのか。適当な言葉で人をたぶらかそうとする人間をどう信じよというのか。

五月某日

宮崎駿の『風の谷のナウシカ』漫画版を読み直す。クシヤナがととても魅力的だ。ガキの时分には分からなかった素敵さがある。そして一コマ一コマの情報量が多い。

小学生の时分にナウシカとAKIRAの映画を見ることでできたのは僥倖だったとよく考える。未だに事あるごとに見直してしまうし、新たな気づきも多い。大友氏の新作アニメや講談社による全集の企画はどうなったのだろうか…。気長に待ちます。

五月某日

ケバブジョンソンのCDはほとんど流通にも乗っていないので自前のオンラインショップで注文を受けている。この日はこちらがファンである人から注文が入り、舞い上がる。早いとこ東京に行って練習したいが、七月辺りまでは気軽にいけないだろうなあ。

五月某日

緊急事態宣言の解除により、保育園への登園自粛も終了するとの通知がきた。息子は入園してからの十日くらいしか登園しておらず、さほど慣れてなかったようなのでまた通わせるのも申し訳なかったが、がんばってもらうしかない。自分は七時には出勤せねばならず朝に余裕がないため、妻が連れて行ってくれたのだが別れ際にものすごく泣いたらしい。もう行かなくていいものと思っていたのだろうか、毎日母親とべったりだったから別れがつかったのだろうか。しかし登園後しばらくしたらケロッとしていたらしいので一安心。子どもなりに順応するものなんだろう。ほっとしたがしかし妻が臨月でもう次が生まれそうなのであと少ししたら実家に帰そうと考えており、慣れ直した傍からまた通えなくなるので心配

になつてしまふ。振り回してすまぬ。

\*\*\*

さつきまで酔っぱらつてた無理したんです  
酔っぱらつてシヨスタコビツチのまねしたっけ  
考えて君と話がしたくなつて

寝ぼけ眼にレモンティーを  
寝ぼけ眼にレモンティーを

なんとかかつてやつの話で疲れちゃつて  
なんでかつてそれもうまくは言えなくなつて  
考えて君と話がしたくなつて

寝ぼけ眼にレモンティーを  
寝ぼけ眼にレモンティーを

君の話を思い出して  
君のかたちを思い出して

いつのまにやら朝になつて  
いつのまにやら昼になつて

いつのまにやら夜になつて  
いつのまにやら朝になつて

ちよつと待つてそんな風には言わないで  
後まで長い尾をひく言葉だつて

そこまで行儀悪くはならないつてねえ  
寝ぼけ眼にレモンティーを  
寝ぼけ眼にレモンティーを

君のことだけ考えて  
君の声だけ聞きたくつて

いつのまにやら朝になつて  
いつのまにやら昼になつて  
いつのまにやら夜になつて  
いつのまにやら朝になつて  
いつのまにやら昼になつて  
いつのまにやら夜になつて

(ケバブジョンソン「レモンティー」 作詞 杉浦真寛)

# 命の波 ドキュメンタリーに学ぶ①

芝野 浩貴

(地球探究家)

只今、二〇二〇年五月二十四日。日本全体が緊急事態宣言解除に向かっている。平素は遊歴して、本や映画や人や自然と触れながらも、移動型在宅介護意味がわからないとは思いますが移動しながらの在宅ケアをしているが、この一ヶ月は前代未聞で実家にて固定型在宅介護として、ソーシャルディスタンスを裏切り、観察ディスタンスで親に接近し、毎日親父の行動をチェックしていた。左の《…》はアーカイブではなく、三月中旬に書き、音信不通 46 号に掲載する予定であった文である。

《母の命日に『サマシヨール』という映画を観た。飯館村に自発的帰郷(ウクライナ語でサマシヨール)する長谷川健一・花子夫妻の元酪農家たちのここ数年の生活の映像である。長谷川さんはチエルノブイリまで出かけて原発事故30年後の今もサマシヨールとして住んでいる老夫妻と交流し、自らの身の振り方を悟る。牛をとりあげられ、草木は cesium から逃れられない。が、いつか故郷を踏む後世のために蕎麦を作り続

ける。

私の母は生涯理髪師で死ぬ三ヶ月前までお客さんの髪を切っていた。富岡町で美容師という生業を奪われたのは深谷敬子さん。自分の店に集まる人々との会話を楽しみに生きてきた深谷さんが震災の語り部と変わるまでのドキュメンタリーは堀潤監督の「わたしは分断を許さない」である。この映画には沖縄で知り合ったKさんも登場する。Kさんとの出会いは音信不通 40号に書いた。その時点で子育てに苦悩するひとりの母親との会話のつもりだった。その後、生業訴訟に絡んだり、映画にも出演していると知った。イデオロギーで原発や基地に反対しているのではない。生業を奪われた生活者としての苦悩。対話には終わりの言葉があるが、共話ではコミュニケーションを作り上げて存在が融合していったら風景に溶け込む。トークショに参加していたジャーナリストの佐藤慧さんも無理に言葉を求めない堀潤の撮影方法に言及していた。佐藤さんは陸前高田出身で二両親を震災で亡くされている。フィクションではないといえども、ドキュメンタリーも監督の編集次第で物語ができてしまう。堀潤は「大きな物語はいらない、主語を小さくしたかった」と話していた。「I」を含むタイトルの小説や映画が増えてきた。サブジェクトとしてのI、アイデンティティのI、IターンのI。述語文化の悪い面としてポリテカルコレクテナスの悪用がある。西洋の強いIではなく、届かないかもしれない弱いIのためらい。安田純平の取材したフィルムも挿入してあった。彼が何故そこまでして外国の

ことを撮りたがるのかという質問に「遠く離れた土地の人の死を想えない人は隣近所の人の死も想えないでしょう」と答えていた。私は他人の子供を観察できない人は自分の子供も育てられないだろうと思つて生きてきたので何かが共鳴した。シリアから逃れてきた子供がシリアに戻る場面でヨルダンで難民教育支援をしている松永晴子さんが泣いていたが、それはドキュメンタリーの次元を変えた「娘は戦場で生まれた」に強烈に繋がる。外国人ジャーナリストでなく地元の母親ワアドが撮影。シリアの戦場アレppoに最後の砦となつた病院で医療活動をする夫とアレppoに留まり娘サマアラビア語で空を意味する)のために映像を撮り続ける。サマシヨールとは原因が違うが故郷から逃げない点では共通するものがある。途中爆撃の被害にあつた妊婦の子供をとりあげるシーンが生々しかった。意識のない胎児の体全体をさすり人工呼吸で母親の命が乗り移つた瞬間を捉えていた。ここ数年で親父が2度意識を失い酸素吸入と点滴で息を吹き返したのでその時の体験も脳裏をよぎる。出産シーンとなると、斎藤陽道親子を追つた「うたのはじまり」が恩寵的である。斎藤さんの子供の樹ちゃんが妻の盛山麻奈美さんから産まれる映像は初体験である。子供を産んだことはないが、子供の出産に立ち会つたことも見たこともなかった。ろう夫妻の子供の樹ちゃん健康者である。音を出すことに臆病だった斎藤さんが子供から声を出すことを学ぶ。斎藤さんの言葉は本で読み、音も入れたという写真は写真展で見て、盛山さんとのコミュニケーションも目の前

で見たことはある。斎藤さんが本を書くのを戸惑つた時、支えとなつたのは若松英輔さん。写真を撮るのを後押ししたのは坂口恭平さん。映像の中に入った時、風呂の中で生まれた「だいじょうぶ」という曲が降りてきた瞬間に人間が本来持つている音の源を感じた。七尾旅人さんは「心から「ぼれてきたね」と感想を呟いた。音を映像として流される絵字幕も声だけで主張するメッセージへの挑戦である。音を観る。その映画の推薦しているのが寺尾紗穂さん。

解剖学者の三木成夫は、あはれは「ああ」というため息であり、ソロモン王の前で子供を殺される母親の子宮(憐れみ)が動き、イエスキリストが打ちひしがれたのを人が見て内臓が動いたと述べていた。つまり、「心は内臓と子宮」だと。母の看取りから20年経つうちに父の看取りを迎えるかもしれない。小さな一はいろんな形で相互触発し、いのちの波を創発している。》

P.S. 右の文を書いてから二ヶ月以上経つが、その間に移動型の時にいろいろお世話になつて店も廃業に追い込まれている。エッセンシャルワークの人を大事にしても、ホワイトカラーの人の社会的貢献を見張ることが真の働き方改革だと思う。これまでの政治・法・教育を超えた新しいパラダイムが必要だ。

## 消えゆくお店続

ムラカミ ヒロミ

(フライングブックマン)

しかし、この心理は何なのだろうかね。小学校、中学校になっても同じようなことを繰り返し、今時の高校生も相変わらず似たようなことをやっている。昔ならともかく、今は画像取込やカラーコピーで、オリジナルのちゃんとしたヤツがきれいに複製できるだろうに。

それはさて置き、プラモデル屋は、子供にとって夢の国だった。

子供の頃の楽しみは、本屋とプラモ屋だった。どちらも、智頭街道にあった。メイン・ストリートの地位は若桜街道に譲ったとはいえ、昭和四十年代は活気があった。川端銀座も現役だった。

行きつけの店は、智頭橋の袂にあった。(今、店舗は若桜街道に移転。跡地は公衆トイレになっている) 何時頃から行くようになったのか、定かではないが、幼稚園の時にはもう、あれこれ買ってもらっていたように思う。お気に入りのロボットがあつて、そのボックス・アートを真似て、毎日のように、飽きもせず、クレヨンでスケッチブックに描いていたものだ。と言うのも、クラスメイトが依頼してくるからで、休み時間に彼らのスケッチブックにひたすら描き続けるのである。クラスには、もう一人、そんな子がいて、あちらは怪獣を得意としていた。

前述のとおり、幼稚園の頃は、ロボットに夢中で、それも、アニメや映画ものより、オリジナルが多かったように思う。そもそも、版權ものであつても、似て非なる形状になるのが常で、二足で安定させたり、歩行させたりしようと思えば、重心を下部に持つてこなければならず、勢い脚部が大きくなってしまふ。鉄人にせよ、アトムにせよ、V3号にせよ、みな足が異様にでかかった。モーターやシャフトを内蔵するから等身もチグハグで、顔の造作なども原作とは程遠いものが多かった。

もっとも、オリジナル物として大差はなく、威风堂々とした格好良いボックス・アートの惹かれて(騙されて)、買つて帰ると、何これ、というような形状、サイズも滅茶苦茶小さい、てなことは茶飯であった。

子供は、こういうことの学習は早く、従つて、購入する時は、必ず箱の中を確認するようになる。出来上がり



サイズの目測と、パーツの多寡で、自分の手に負えるかどうかを判断する訳である。この過程は絶対に省いてはならなかった。

その後、興味は、サンダーバードのようなメカニックと、ガメラ（日東）やゴジラ（マルサン）のような怪獣に移り、最後は城や馬車や蒸気機関車といったリアルなものに落ち着いた。かくして、小学生にして、ペンチやニツパ、ヤスリの使い方に習熟していくのである。

いやもう、色々なものを買いましたな。五十円の俗にモナカと呼ばれる、前後を貼り合わせるだけのウルトラ怪獣やパチモン宇宙人から、パーツが滅茶苦茶細かいD51まで。しかも、それら完成品のどれ一つとして手元に残っていない、というのが如何にも子供時代の玩具である。

子供の背丈くらいのサターンV型ロケットがショーウィンドウに並んだ時は、喉から手が出るほど欲しかったが、流石に値段も一万に近く、とてもねだれるようなシロモノではなかった。その代わり、ではないが同じメーカーの月着陸船イーグルを買ってもらった。説明書が英語で閉口したが、それでも絵だけ見て、どうにか組み立てることができなのがプラモであった。

高学年になると、なぜかライトプレーン（ゴム動力の

模型飛行機）が流行し、友達と競うように、夏休み中は毎日製作にふけり、学校のグラウンドに飛ばしに行ったものだった。プロペラ部と車輪がプラスチックで、あとは木と紙である。本体は角材。翼は、竹ひごをヒューム管で繋ぎ、和紙様の薄紙を貼り、ゴムで本体に固定する。プロペラから、尾翼下部まで長いゴム紐が繋がっていて、これが動力源である。プロペラを、もうこれ以上無理という所まで回し、手を離せば飛んで行くという至ってシンプルな玩具である。車輪も付いているので、離陸させることも可能だったと思うが、それを試した記憶がない。上手いかなかったので、直ぐに断念したのかもしれない。主翼の位置とか、反りの按配で飛距離が違うので、試行錯誤に明け暮れた。父親（昭和ひと桁世代）の子供時代にもあったというから、随分息の長い玩具である。しかも、筆者の子供時代から半世紀経った今でも売っているのだ。シンプル・イズ・ベストということであろうか。

最近、この店の前を通ると、いつも扉が閉ざされたままで、店主療養中の貼紙がある。一日も早い本復と再開を願いたい。

# 「鳥の劇場」からのライブ配信



山本 千津子

(スオリカ コーシカ)

14時過ぎても始まらないなんておかしいなあ。お客さんがないのだから着席まで待つ必要はないだろうし、やっぱり、おかしいよなあ。ちよつと焦ってきた。マウスをくるくる動かしていたら、ライブ配信の画面に現れたのは、芸術監督さんの頭のとっぺん。「えーっ、挨拶終わってしまったの？ ショック！」すでにこの時点で明日も見ることに決まり。あと7回チャンスがあつてよかつた。そして聞こえてくる。「何やつてんの、劇場と同じようにただ座つてるだけでお芝居が始まるんやないで。自分の手でここをクリックせなあかんのや、わかつた？ 明日は失敗せんようにな」開演には間に合つた。

毎年、「鳥の劇場」ではゴールデンウィークに子供も大人も楽しめる作品が上演される。緊急事態宣言で今年はおきらめていたが、なんと、公演があるではないか！ いつもと違うのは、鹿野にある劇場ではなく、見る人の居

場所が劇場になるということ。えっ？ でもどうやって？ インターネットにつながったスマホやパソコンでライブ配信される公演を見ることができなのだ。ライブとは、生、すなわち鹿野の「鳥の劇場」で観客がいない中、俳優さんたちが演じている舞台を私たちはそれぞれの場所で見ることができ。連休中に8回、それも無料で。私には信じられなかった。

上演作品である『帽子屋さんのお茶の会』の案内には、お茶やお菓子を用意して一緒にお茶の会で歌いましょう、とある。想像するだけで楽しくなる。「不思議の国のアリス」に関連しているようだから、お茶はやっぱり紅茶かな、クッキーにしようかビスケットにしようか。このところ買い物に行くのもおつくうになつていた。出入り口での消毒、周りの人との距離を気にしながら商品に近づき、レジに並ぶのも支払いも決められた通りに従わなければならぬ。買い物はできるだけ早く済ませてまめ買い、というのに反して今日は、「お茶の会のために」ゆっくりお菓子だけを選びにお店に行こう！

準備OK。観る側もそれなりに心してというか、受け身ではいられない。だつてお茶会に招かれるのですから。舞台では帽子屋さんが開くお茶の会に、アリスをはじめ

いろんな人がやって来る。その人たちの言葉のやり取り、表情、動きに、一人、部屋の中で大笑いしてしまう。劇場だったら子供たちの笑い声が響いて一緒に笑えただろうに。あれっ、私の知らない俳優さんのようだけど、こんな時、劇場なら当日のパンフレットがあって配役がわかるのに、と思っていたら配信画面の下に歌詞カードとともに用意されていた。劇場では聞こえづらい人のために手元で見れる字幕の機器があるが、その代わりに台本が公開されていた。帽子屋さんのために作られた子守歌と一緒に歌ってみる。自分の歌った声を送るとみんなの合唱になって、回を追うごとに違った合唱団が作られて、聞くことができる。

帽子屋さんのお茶の会では、みんなで「かくれんぼ」をする。「もーう、いーいかい?」「まあーただよー」と舞台上で繰り返されるこの言葉が、私には「(自粛生活)もう(やめても)いいかい?」「まだまだだよ」と聞こえてきた。また、劇場では自分が見たいところ、見えるところしか見ていないが、今回は私たち観客の目となったカメラさんのおかげで、いろいろな角度からお芝居を楽しむことができた。ふと思つた。国会や政府に関するマスコミのカメラ、報道は私たち国民の側に立って見せてくれているのか? 「そうじゃないんじゃないの?」

本当に間違っていないの?」舞台から眠りねずみのセリフが聞こえてきそうだ。

初回に見逃した芸術監督さんの挨拶。劇場ではいつも私たちをあたたく迎えて下さる。そういった心地よさの中でお芝居が始まるのはYouTube上の画面を通して同じだ。作品の理解につながることも話して下さる。どこかの大ホールで急にお芝居が始まるのとはぜんぜん違う。終演後の挨拶では、前回に寄せられた感想なども紹介されたので興味深かった。劇場ではアンケートに自分の感想を書いて帰るだけだから。

パンフレットによると鳥取県の支援でこのライブ配信が実現できたそうだ。他県の私たちにまで喜びを与えてもらった。国からはマスクも十万円もまだ届かない。鳥取県からは文化が届いた。「鳥の劇場」の公演を見て楽しいひと時を過ごせた人が全国にいる。公演後の今、千秋楽の動画がYouTube上で公開されている! 皆さん、新しい生活様式の中に「帽子屋さんのお茶の会」を見る」を加えてみませんか。大笑いして免疫力をアップして、九月には「鳥の演劇祭」に行きましよう。

# 鳥取あれこれ その四十六

内田 克彦

(地域研究家)

『都新聞』の復刻版(柏書房)を必要があつて見ていたら、大正二四(一九二五)年三月二九日付けで「長慶天皇の御陵は面影山が有力」との見出しが目に入った。記事を見ると、次の記述があつた。

御陵の数は驚く勿れ三十一箇所に多きに及んでゐる(略)然るに最近に上申された

鳥取市郊外一里ばかりに在る面影山が最も有力なもので傳説記録などに信ずべき證據も多く、鳥取は當時南朝の名臣山名一族が據つたところだから天皇がひそかに御幸なされたと信ぜられる節も多い(略)

講談社学術文庫から最近発刊された、外池昇著『天皇陵「聖域」の歴史学』によれば、一九二〇(大正九)年に八代國治著『長慶天皇御即位の研究』が刊行されたことにより、その皇位が証明された、とあり、原武史著『皇

后考』には、一九二六(大正一五)年一〇月二一日付けで公布された証書により、長慶天皇の在位が確定し、その結果、神武から当時の大正までの皇統が確定した、と詳しく書かれている。こういった動きの中で、御陵の場所に関心が集まってきたのだろうか。

さて、明治以降、政府内において御陵の確定に尽力したのは、因幡二十士事件の一人、足立正聲(まさな)である。彼の諸陵行政での実績は東郷茂彦著「明治二十二年の陵墓治定(ちじょう)」と、足立正聲「論文に詳しく記されているが、長慶天皇陵が除かれているため、残念ながら確定の「最終段階」とはならなかった。宮内省諸陵助として担当した時期には長慶天皇の在位が確定されていなかったためであるが、地元にある有力な候補地の情報を入手していたのかどうか、気になるところだ。

長慶天皇の御陵が嵯峨の慶寿院址に決定されたのは、一九四四(昭和一九)年の紀元節である。前掲『天皇陵』によれば、伝承のある場所が一九三六年七月一〇日の段階で八〇か所であったのが一九三九年六月三〇日の段階では一〇七か所に達し、北海道から九州までの広がりを持つに至った、とされる。面影山の位置付けはどうか。

外池昇著「臨時陵墓調査委員会による長慶天皇陵の調査―設置から「伝説箇所」の審議まで」論文の末尾に、「昭和十一年四月調製」の「極秘 長慶天皇御陵伝説箇所関係書類審議一覧一」が史料として翻刻されている。青森県の地から始まった六〇番目に「鳥取縣岩美郡面影村櫻谷」が挙げられており、「単ナル想像ニ據ルモノ」欄と「伝説ニ據ルモノ」欄は空欄で、「附会ノ説ヲナスモノ」欄と「偽作偽物ニ據ルモノ」欄に〇印が、「摘要」欄には「玉川宮関係ヨリ生セシト思ハル、附會ノ伝説ナリ」と書かれてあった。

昨年の五月一八日に、高橋正弘氏の案内で、三つの石塔群に到達することができた。見事な宝篋印塔であるが、初めからそこに在ったとは考えられない場所に立っている。各号に詳しく長慶天皇に関する研究成果が載せられている、面影郷土史研究会による会報『面影郷土誌』第14号(昭和57年1月20日)を見ると、「長慶天皇陵墓修復完了」と題して、「昨年七月三日当地を急襲した豪雨」によって「陵墓左後方の山肌は大きく抉り取られ、三基の宝篋印塔は直撃を受けて押し流され、土砂や倒伏した雑木で埋没し」た、との記述があった。

実は、『新鳥取県史資料編 近代5』に「緒言」が掲載

されている、檜柴竹造著『長慶天皇因幡潜幸御事績考』が一九一七(大正六)年四月に発刊され、『面影郷土誌』第20号(昭和57年7月26日)によると、早速六月には「内務省嘱託宮内省御用掛諸陵考証課長増田宇信」が「県社寺課長檜柴竹造」の案内により岡益石堂の調査のため来県し、帰途、現地を訪れているのである。

しかし、その後「上の2基を下して大きい塔の後ろに遷」すという「取り返しの付かない大失敗」をし、「宮内省諸陵頭等の諸官」が来たとき、その「作為」と証拠書類もないという理由で、「却下されて了った」。

先日集英社文庫から刊行された瀬戸内寂聴と美輪明宏の対談集『びんぼんぱん ふたり話』では、長慶天皇を取り上げ、「戦争が負けるときに立派なお墓ができたのは怨霊封じなんですね。」とか、霊視すると「とてもいい男で、ちよいと私の趣味だった」とか、とても盛り上がっている。

# ひそやかな声 続々 ③

秦阜梅林 (やすおか ばいりん)

(楽人)

9

先にシューベルトの衣鉢は20世紀、Rシュトラウスやシベリウス(ヴィーンに留学)に継がれたと書ひたが厳密に云ふと更に世紀末、遂に戦後アヴァンギャルドに行き詰まった魁斗「ベリオが先祖還りの対象をガブリエリやモンテヴェルディ等ルネサンス(バロック期の巨匠から徐々に時代を降り最終的にシューベルト歌曲のオーケストラレーションに腐心してゐた事実が如実に語つてゐる。決して偶々とかでは無く、もはや『膠着した保守』と化した『戦後前衛』、其の先端の…行き着く必然の『場』で在つたのだ、シューベルトが!だ。

更にポップ系ミュージシャンの多くが『シューベルトにシンパシーを』感じ、愛唱する事実も今に生くるシューベルトの影響を圧倒的に物語るもの。J.デンバーやF.シナトラも愉しきさうにセレナーデを子守歌を歌つてゐた…。

10

『泣いたり笑つたり』※と云う、ごく小さな歌曲がある。掌編と云つてもよい、ささやかなもの、しかし此処にはシューベルトのエッセンスが凝縮されて居る。

全編は、軽やかでスキップのやうなダンスのステップを踏み優雅で快活に歌はれる生活の描写。題名通り悲喜交々が次々と現る。其のテムポの目紛しく鮮やかな事。

メランコリーや悩みが次々心を捉へても弾むリズムは揺がなひ。朗らかな歌声が一転悲しみの其れに替はる。鮮やかな転調が劇的に演出する深層心理の自然な描写。凡そこんな表現はモーツァルト→シューベルトと云ふ塊出身2人の歌謡型天才にのみ可能で其の最終型であるシューベルトに倣ひロマン派の襷を繋ひたのは、ワルシャワからヴィーンに出て来たショパン。彼によって支流はセーヌ河畔へと運ばれラヴェルに。先に挙げたリストとは違ふ傍系のシューベルトティアーナである。

11

天が澄み切つた青空から一転夕立、霰や雹を齎した

かと思ふと次の刹那には虹の橋立を遙か彼方に迄延ばしてゐるやうに彼らの変幻自在な転調ぶりは所謂3B、大バッハー、ベートホーフエン、ブラームスと云つた生真面目で論理的な独逸人の器楽家（の内、後二者は人生の後半永くヴァーンに棲み、人生を送つたにも拘らず）には想ひもよらぬ一見気紛れに、人生の無常を深く刻印してゐて、其れは転調と云ふ色彩の変化に留まらず形式にもくつきり現はれて居る。

12

以前、僕は独留学を終へ帰国した、極めて優秀な或るピアノストが『シューベルトのピアノ曲は、小品には絶品が多いのに残念…大規模なソナタには見るべきものが無い、形式が弱いから』と云ひ放つたのを聞き啞然とした。『形式が弱い…のでなく貴方の頭が固過ぎるのです』とは云はなかつたが…実際、我が国では極めて勤勉な識者の中にこんな暴言を口にする輩が尚多ひ。

シューベルトの『自由過ぎる』形式は、内側から自然に語られたもの、理解するには知性や技巧、勤勉さだけでは足りなく音楽性こそが問はれる。即興曲集や楽興の時で万人を唸らせた彼も、ソナタに在っては弾きてに

『真の詩人』だけを欲する…従つて此の分野は非常に『理解しにくひ』のだ…。

以下次号

※『泣いたり笑つたり』（或るひは『笑いと涙』）D777  
(Fr.リュッケルト詩) 1823-

【今回のディスク】

Fr. p シューベルト Pf ソナタ

- ① ト長調 D894 E. ドホナーニ、1959 ライヴフロリダ大 学
- ② イ短調 D845 W. ケムプフ、1953 U K 録音
- ③ ニ長調 D850 R. ルプー、1981 ライヴルーマニアアテ  
ネウル
- ④ イ長調 D664 G. アンダ、1965 ライヴルツェルン音  
楽祭

# コロナの時代の愛

(下)

古賀 啓三

(米国ミシガン州隠棲)

新しい年度の始まりを間近に控え、その準備に忙殺されていた三月半ば、州知事によるコロナ防疫の為のロックダウンが発令された。

それに先立つ二週間の外出自粛の際は、経営層だけは出社していたが、強制力を伴うロックダウンで、山崎を含む全社員が在宅勤務となった。

会社の方針で、全本社社員とその帯同家族に一時帰国命令が出たが、山崎のみそれに背き、アメリカに留まった。

子供のいない山崎は、妻に一人で帰国するよう勧めたが、自分も残る、と言い張るのが、やや意外であった。しかし、身の回りのことや、飲み食いさえ、自分一人ではままならなかったであろうことは自覚している。

妻の父親は、本社の四人の副社長の一人で、義父が部長時代にその勧めに従って娘と結婚したのは先見の明で

あり、事実、自身の役員昇格にも少なからず後押しとなった筈だ。しかし、庭いじりと、詩を読んだり書くことだけが趣味の妻を、面白味のない女と軽蔑していた。そこには、何の、そう「野心」も、刺激を伴う上昇志向も無い。自分やシドニーとは、メタファーではなく、実際に住む世界が異なっている。

本社や北米統括拠点の上層部とは、頻繁にビデオ会議を実施したり、決済などの執務もあるのだが、終日家に籠っていることは想像以上にストレスフルであることを知った。ビデオ会議で垣間見るシドニーの表情も、気のせいかな憔悴しているように見える。

製品の納入先の製造ラインや、自社の製造現場も作業員の感染等により、やがて麻痺が拡がり、何よりも市場の需要自体が冷え込んで、家にいなければならぬ、という表層だけではなく、仕事自体から、徐々に喫緊、という緊張が薄れていった。

誰に詰め腹を切らせることも為らず、策略で排斥することの敵わぬ疫病が、自分のキャリアの命取りとなるかも知れぬ不条理に、居ても立っても居られず、せかせかと家中を歩き回り、妻に当たり散らす。

しかし謂れない焦燥の捌け口とされた相手は、状況



に怯えるようでも、浮き足立つようでもない。

飛び立ったまま帰らぬ鳩のように、家庭を顧みることのなかつた夫は、妻の日常などというものに微塵の興味すら持たなかつたが、恐らくそれはこの事態に何の影響も受けてないのではないかと感ずるに至った。

そのような気付きに、女の行動を注意して眺め出す。何がきっかけであつたか思い出すことすら出来ないが、寢室を分けているので、妻がいつ起きだすのかは分からない。が、山崎が階下に下りていくと彼女は既に身繕いを済ませて居間で書き物をしており、夫に気付くとほぼ準備の整えてある朝食を供すが、自分はもう済ませているのか、朝食を食べない習慣なのか、共に食卓には着くがお茶を喫するのみである。それが終わると片付けを済ませ、暫く庭仕事をするようであるのが、山崎が仕事場としている書斎の窓から見える。

これは一緒に食べる昼食まで、何をしているのかと、足音を忍ばせ、戸口に立って、書斎以外は間仕切りの少ない開放的な一階を見回すと、やはり朝食前同様、居間で、低く鳴らすクラシックを聴きながら、書き物を続けている。それは、夕食の準備前に小一時間散歩に出る様子だが、その直前まで続けられる。

夕食の片付けが済むと、居間の同じ位置で、今度は何かに読み耽ることも、判で押したように変わらない。

山崎は同じ家中で、疫病の後先に関わらず、日毎繰り返されるこの日常が、それを眺めていることが、少しずつ自分を鎮静していくことに気付く。

事実上、仕事らしい仕事もなくなつて、山崎は妻の平穏と同化したいと希求するが、自分には詩を書くなどという趣味はないので、居間から一番離れたフォーマル・ダイニングルームの食卓に座り、仕事をする振りをしながら妻を眺めていると、今度は、一体何を書いているのだらう、という興味に囚われる。一旦気になり始めると、我慢がならず、ある日、妻が寢室に引き上げた後、居間の彼女の定位置に行き、去来する詩の断片を書き付けておき、後からラップトップで清書するらしいコピー・ペーパーの束の一番上の一枚を取り上げて見ると、読みにくい箇所もあるが、次のような走り書きがしてある。

街に太陽の季節の賑わいが訪れかけていたのに、太陽冠という名の疫病が齎したものは静けさ。

眩しさの中、黒点かと思つたものが見ると大きく羽ばたく、放たれたまま戻ることのなかつた黒い鳩。

太陽冠が連れ戻した黒い大きな伝書鳩と静謐。

それが私、が得たもの。

# アーリオ・オーリオ

あきの素生

(くうねるめがね)



基本的にステイホームで、人のいる場所ではソーシャルディスタンスを保つこの生活様式は、にんにくを効かせた料理を気兼ねなく楽しむことのできる生活様式でもあると気付いた。にんにくが入っているといないとは、味わいが全然違うものな。元気も出そうだし。ということ、にんにくの消費量増し増しの今日この頃だ。

にんにくは、買ってきたら皮をむき、袋に入れて冷凍しておく。それを少しずつ取り出して使う。

にんにくをスライスして、熱したオリーブオイルでじっくりと揚げ、ガーリックチップスをつくる。オイルは強火で十分に熱する。にんにくを入れる前に弱火にして、ほんのり色づくまで、時間をかけて揚げるのがこつ。余熱で火が通るので、まだ物足りない、というくらいで引きあげておく。引きあげるときは、ふにやふにやと柔らかいが、時間が経つとかりつとしてくる。丁寧につくったガーリックチップスは、何にかけたってきつとおいし

い。

にんにくの味と香りが溶け出したオイルで、刺身用の小ぶりな天然ハマチを表面だけ焼くのが好きだ。「ツバス」と呼ばれるくらいの若いハマチは、脂が少なくさっぱりといただくことができるが、パンチがほしいときは、もつぱらこの食べ方をしている。ハマチに塩とこししょうで味を付け、熱したオイルで両面をさっと炙り、皿にあげる。オイルを上から回しかけ、ガーリックチップスをのせる。炙った表面のほろつとした食感と、きゅつとしまった身、ガーリックチップスの香ばしさを、オイルでひとまとめにして味わう。週末の夜、ビールか白ワインと一緒にいただくと、一週間の疲れがほどけていく。ちよつとしたごほうびご飯だ。

このガーリックチップスとオイルは、もともとは“ペロンチーノ”を作るために覚えたしろもの。なので、もちろんペロンチーノにも使う。にんにくを引きあげたあとのオイルに、鷹の爪を少々。ゆでたスパゲッティをフライパンに入れて、オイルと絡める。塩とこししょうで味をととのえ、皿に盛りつけてガーリックチップスをふりかけるのは、ハマチと同じ。簡単なので、休日の昼食には重宝する。春キャベツやほたるいか、スナッブエ

らんどなど、季節の食材を入れるのもいい。

にんにくとオリーブオイル、鷹の爪の組み合わせに、ブロッコリーを加えた。パスタも気に入っている。こちらでは、にんにくはみじん切り。ブロッコリーも粗みじんにして、にんにく、輪切りにした鷹の爪と一緒に耐熱容器に入れる。水少々とおリーブオイル、塩をかけて、レンジで加熱し、やわらかくなったブロッコリーをフォークでざくざくつぶしながら全体を混ぜたら、ソースのできあがり。このソースをパスタに絡めて食べる。緑色が映える、きれいなパスタ料理だ。ブロッコリーの風味とにんにく、オリーブオイルが絶妙に合っていて、おいしい。

パスタが好きで、今までいろいろ作ってみた。ペペロンチーノ、ブロッコリーのパスタ以外にも、明太子。パスタ、カルボナーラ、ペスカトーレ、ナポリタンなど。『イタリア料理にチャレンジ！かんたん手づくりパスタ』（山谷郁子著、汐文社、2005年）という本をたまたま目にし、じゃがいもからニョッキを作ったことも。明太子パスタには、元のレシピには無かったマヨネーズを入れるようになり、最初はペスカトーレだったものが、今や魚介を入れないトマトソースになっている。ニョッキは一度し

か作らなかつた。覚えたレシピは淘汰されアレンジされて、好みのものだけ好みの形で身についている。でも、ガリックチップスの作り方はずっと変わらず、基本を守っている。それが一番おいしくなる方法だと感じるからだろう。

「アーリオ・オーリオ」。にんにくと油。この生活に力をくれる組み合わせ。今後ともどうぞよろしく。



（イラスト あきの素生）

# 駅前通りの憂鬱



ドラメリア (座敷わらし)

新年度が始まって二カ月。職場にもようやく慣れてきて、生活習慣がだいたい固まってきたように思う。異動とコロナ禍が重なったため、自分の生活や行動もあれこれ変わったことが多い。

土日が休みになり、遅番勤務がなくなり、エプロンをしなくなった。……これは前にも書いた。子どもの本をあまり読まなくなった。本の感想をSNSに書くことをしなくなった。読んだ本について会話したり薦めたりする機会が増えたので、自分の中の欲求が満たされたのかもしれない。

オムライス巡りをしなくなった。これは単に外食を控えていたからで、卵への愛が減衰したわけではない。もう少し状況が緩めばそろりそろりと始めたい。

朝が早くなった。ジョギングや散歩の人々とすれ違いながら自転車疾走する。もともと早起きなので早朝通勤は苦にならないし、暑さもましなので快適だ。

一番変わった(てしまつ)たのは、駅前から続く通りが

まったく油断のならない道になってしまったこと。朝は問題ないが夕方はいよいよもので、終業後の約二時間は魔の遭遇タイムだ。まず信号待ちで生徒の集団に出くわし、走ってはぼろぼろ連れだつて歩く生徒たちを追い越し、下手をすると店に入っても顔を合わせる。職場を一步出れば座敷わらしに戻りたいわたしとしては、ドラえものの“いしころ帽子”が欲しいところだ。

ちなみに、ポロシャツ星人なのは変わらない。二週間毎日取り換えて着ても余るぐらい持っているのですが、この時期から夏の終わりまではポロシャツ星の使者を務めつづける。



## ・編集後記:

先日メガネをかけたままうとうとして、うっかり身体の下敷きにしてしまい、フレームがぼっきり折れました。同じものなので二つも変わったようには見えませんが、実は2号機なのです。

ドラメリア (編集長)

博報堂の編集者、大塚結良さんにサイト「note」で定有堂書店をレポートしていただきました。雑誌『広告』vol.414 (特集: 著作) の案内で来店された折の印象記です。ありがとうございました。

<https://note.kohkoku.jp/n/n358b8a9e7c5c>

奈良敏行 (発行人)

